

人生 苦あり

笑いあり



秋保喜美子

あきやす きみこ / 1949年生
まれ。結婚、出産、子育て、作業
所の立ち上げにも参加。障害者自
立支援法違反訴訟元原告。著書に
『ふたりのエース 障害のある人
と65歳の誕生日』（浅田達雄氏と
共著・きょうされん発行）

第2回 我が青春時代

友だちづくりに専念したため、中学卒業後、高等部への進学も許されず、職を手につける施設に入りました。2年後、更に実務を必要とする授産所へ行きましたが、上下肢ともに障害の重い私にはとても大変で、3年間辛抱しましたが、無理な姿勢で作業を続けることから肋間神経痛に。痛みに耐えながら居場所を探し、重度障害者授産施設を見つけすぐに変わりました。市内から離れた山里にできたこの施設は、開所して2年目で、規則も緩やかでアットホームな施設でした。ここからやっと私の青春が始まりました。

私たちの時代は、フォークソングの大ブーム、ファッションはミニスカートやすそ幅の広いパンタロンが流行。ミニスカートをはいて、男性の前で転ぶこともよくありました。「箸がころんでもおかしい！」まさにその通りで、よく笑い、よく食べ、大学生のキャンプに「キャーキャー」喜んだりしていました。

農耕作業班指導員のMさんから「全障研サークルに入らんかねえー？」とお誘いを受け会員になりましたが、とても不真面目な会員でした。その頃の私は、とても大変な環境の中で生き抜いておられる2人の先輩方の話を聞くことに夢中でした。先輩の話には、私の知らないことばが次々出てきて、「何それ？」の世界でした。先輩の話聞く中で、戦争は

人間を狂わしてしまうこと。正しいことを言っても通用せず投獄されていたこと。日本に連れてこられて安い賃金で働かされ、貧しい家庭で育った話。事故に遭うと自分が悪くなくても差別的なことばを浴びせられ、罰金をとられる悔しい話も。2人の先輩との出会いは、私を大きく成長させる力になったと感謝しています！施設から近いお店に数人で買い物に行った際に、車椅子が危なっかしいと思われ、ご近所から「外出させないでほしい！」という電話が。外出がむずかしくなった時、障害者をとりまく社会の冷たさもあらためて感じる日々でした。

施設ではとても民主的な自治会が結成されていて、先輩はみんなからの声を職員に届け懸命な交渉をしてくれていました。そんな中、先輩から「結婚するから退所することに！自治会を頼む！」というとんでもない告知が。とても先輩と同様のテクニックもないし、大体私に務まるわけがない…とはいえ、誰も受けてくれなくて、結局7年間やりました。一番思い出深いことは、外出できない不便さを少しでも解消するために、みんなの買い物ノートを作り、毎週末に集計しお店に注文し、届いた商品を分け、精算から支払いまでの手間のかかる作業を自治会でやっていました。チームワークが良かったんでしょうね！